

中世の額安寺と周辺地域

水野章二

The Kakuan-ji Temple and Its Vicinity in the Medieval Era

はじめに

① 平安・鎌倉期の額安寺領

② 律宗寺院額安寺

おわりに

【論文要旨】

平安・鎌倉期の額安寺文書は数段程度の売券類が多数を占めるが、その多くは連券として、鎌倉後期に額安寺に入ったものであり、所在地も周辺に散在して、膝下に集中する傾向は見られない。額安寺が寺領を集積していった鎌倉後期は、春道氏ら周辺に所領を持つ在地の上層クラスが額安寺に入り込んでいく時期であった。額安寺が古代以来の額田部・宗岡氏の氏寺の枠を越え、所領寄進・買得や入寺などを通じて、周辺地域の人々との関わりを深め、地域寺院としての性格を強めていくにつれて、氏寺としての経営は次第に困難性を増し、別当職をめぐる相論も起る。額安寺が地域寺院化していく際、信仰の地域的ネットワークの重要な要素となったのが文殊信仰であり、それを契機に西大寺流律宗の叡尊・忍性との結びつきが強められていく。春道氏の学春は額安寺に居住し、叡尊・忍性の活躍を支えて、額安寺律宗化の基礎を造った人物であるが、その子信空は叡尊を継いで二代目西大寺長老となる。嘉元元年（一二

〇三）の額安寺別当職寄進を待つまでもなく、弘安年間にはすでに西大寺の末寺的色彩が強められていた。

額安寺の律宗寺院化が進行するとともに、額安寺の墓所としての性格も顕著になる。忍性など寺院関係者以外にも、六波羅探題北条盛房の墓地の存在も確認され、また一条家出身の大乗院門主慈信は額安寺を自らの墓所に定めて、金岡東荘を「追善万代之料」に宛てており、「額安寺殿」と呼称される場合もあった。

中世後期の禁制からは、額安寺が額田部郷の検断に関与していたことも明らかであり、地域結合の核としての地域寺院額安寺の姿を見ることが出来る。